

ある幼児の死生観

——孫との対話から——

辻 正三

久しぶりに訪ねてきた満五歳の誕生日を迎えて間もない孫娘が、部屋に入るなり「おじいちゃんはもうすぐ死ぬんだね」と話しかけてきた。還暦も定年も過ぎ第二（？）の人生に入り、折にふれて漠然と死の影を意識するようになっていたわたくしは、一瞬息所をつかれた感じで返事に窮してしまい、ちょっと間をおいてから「ああ、そうだよ」と答えた。孫は、「それからおばあちゃんが死ぬのね」という。そこでわたくしは、「それじゃ、くっちゃん（孫の名）は？」ときいてみた。すると、「おばあちゃんのあと、ずっとたっておかあさんが死んで、そのまたあとずっとた

ってから、くっちゃんが死ぬの」という答がかえってきた。

一体、幼児は「死」というものをどうみているのであろうか。いくつか質問を投げかけてみたが、きき方がまずかったせいもか孫はのってこず、会話はあらぬ方向へ外れてしまい要領をえずに終ってしまった。

その後の母親の話によると、当時孫は「死ぬ」ということが大変気がかりで、しばしば母親に質問していたが、最大の関心は母親の死ぬこと——すなわち母親がいなくなることであり、死そのものが問題になったのではないらしい

のである。そして、そのような「マターナル・デプリヴエーション（母性的養護の喪失）」への懸念が、大きく彼女の心を占めたのは、孫が毎日熱心にみていたテレビの子ども向け連続ドラマの主人公の少女が母親の死に遭遇したことのアイデンティフィケーション（同一視）のためだったようである。

孫にとって死そのものが問題でなかったらしいことは、それから一か月ほどたつて訪ねてきたときのわたくしとのやりとりからも推察された。わたくしの家には十七歳にもなるおとなしい老犬がいて、彼女が来るたびによい遊び相手だったのであるが、これが彼女の来る一週間ほど前に死んでしまった。わたくしは、彼女が来るなり、「クマ（犬の名）死んじゃったよ。お墓をお庭につくってやったからみておいで」といったが、彼女は「ふうん」といって、窓ガラス越しにチラッと庭の方をみただけで、特に目立った反応を示さなかった。手ごるな遊び相手もまのあたりにいなければ、それだけのことといった感じである。「おじいちゃんも、もうすぐ死ぬんだね」とわたくしがもちかけてみても、「うん」と軽くうなすくだけで話のつてこない。母親の喪失への懸念につながる「死」ということに対する

強い関心も、どうやら一時的なもので、彼女が熱心にみていたテレビドラマが終るとともに意識の背景に後退してしまったらしい。先日の「おじいちゃんももうすぐ死ぬんだね」という孫のことばに対して、潜在的に「死」を考えだしていたわたくしの方が、どうやら過大に反応したきらいがあったようである。

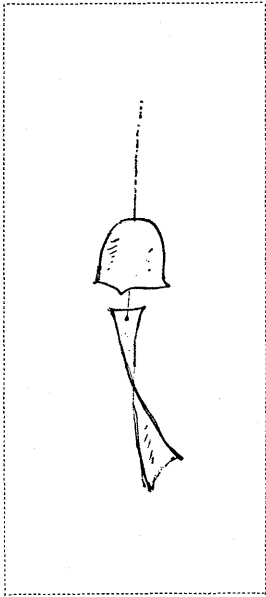
では、「死ぬ」に対する「生まれる」ということは、孫にとつてなになのであろうか。思いだされるのは、一年あまり前の妹の誕生前後の彼女の言動である。

保育園で最年少組から、つぎの三、四歳児の組に移って一年、そのなかでも年長になったころの孫は、しきりに犬を飼いたがり、また赤ちゃんをほしがっていた。そのうちに、実際に母親が妊娠し、母親は、「きょうだい」の生まれることに対する心の準備をもたせるための働きかけを、折にふれて始めた。そのころ、わたくしの家にやってくる時、「くっちゃんのうちに、赤ちゃんが生まれるよ」といって、大変満足そうであったが、「男の赤ちゃんがいい？女の赤ちゃんがいい？」ときくと、「女の子」という。「どうして？」ときくと、「男の子はおとうさんのおなかから生まれるし、女の子はおかあさんから生まれるでしょ。う

ちの赤ちゃんは、いまおかあさんのおなかのなかにいるんだもの」という答であった。

やがて、幸いにも彼女の「期待」どおり妹が生まれ、彼女は大よろこびで、小さい体で抱きたがったりミルクを飲ませたがったりして、親たちをヒヤヒヤさせたが、それもしばしの間でおさまり、しだいにライバル意識やジェラシーを折にふれて示すようになっていった。

妹が満一歳の誕生日を迎えたころのある日、彼女一家がまた、わたくしの家を訪問してきた。彼女の母親が、母親の母親すなわちわたくしの妻と雑談をかわしていて、「わたし、鏡台が一つほしいと思っているの」といった。そばでこれを見かねた孫のいわく、「くっちゃんは、も



う「ぎょうだい(兄弟)はいらないわ」

お人形かベットとして待望していた妹も、満一歳を迎えてそろそろ一人前に行動するようになると、満五歳数か月の姉にとっては、いささか手にあまる存在になってしまっただけなのである。

生まれることや死ぬことについての認識も、幼児にとっては、身近にいて自分の必要や要求をみたしてくれる者の存在と喪失に対する自己中心的思考にはかならないのであろうか。ふりかえって考えると、わたくしをふくめた一般のおとなの死生観も、基本的にはこれとたいした違いがないような気もしてくる。